

氏名	EI THANDAR AUNG	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 6289 号	
学位授与の日付	令和 2 年 9 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	Japan-Myanmar Relations in Political, Economic and Cultural Contexts during 1930s (1930 年代における日本＝ミャンマー関係 —政治的、経済的、文化的文脈を中心として—)	
学位論文審査委員	准教授 土口 史記	准教授 渡邊 佳成
	准教授 和田 郁子	名古屋大学准教授 土屋 洋

## 学位論文内容の要旨

ミャンマーと日本の関係史については、これまでの研究は、アジア＝太平洋戦争期における日本軍の侵攻および日本軍政期に集中し、独立の父アウンサン将軍を中心とするミャンマーのナショナリズム運動と日本との関わりに焦点が当てられてきた。また、その前史として、日露戦争における日本の勝利がアジアのナショナリズムに与えた影響を考える一幕として、1910年代の政治僧ウー・オッタマの日本訪問や地方土侯国による日本人顧問招請などがエピソード的に語られるのみであった。Ei Thandar Aung の学位請求論文 “Japan-Myanmar Relations in Political, Economic and Cultural Contexts during 1930s” (1930 年代における日本＝ミャンマー関係—政治的、経済的、文化的文脈を中心として) は、これまでほとんど言及されてこなかった 1930 年代の両国の関係に光を当て、同時期に日本を訪れた 3 人の記録を、ミャンマー側のみならず、日本に残されたわずかな記録をも丹念に渉猟し、1930 年代半ばから後半にかけての彼らの日本訪問がミャンマーの人々の日本に対する関心を喚起し、日本政府（軍）のミャンマー・ナショナリズムへの接近を橋渡しするなど、その後の両国の関係の深化にとって重要な役割を果たしたことを明らかにした労作である。

第 1 章「1910～40 年における日本＝ミャンマー関係」では、先行研究に依拠して、1907 年と 1912 年のオッタマ僧正の訪日、1906-1908 年の干崖土司の訪日とその後の留学生派遣などについて概観した後、両国の政治関係は、1920 年に日本が領事館を設置するも特段の進展はなかったが、1936 年以降、第 2 章で詳しく紹介するウー・ソオヤバモオ博士、タキン・ミヤなど立場の異なる幾人かのナショナリストたちに資金援助するなど、日本側の急速な接近の動きがあったことを明らかにし

た。また、両国の経済関係については、1926-27年頃にピークを迎えた貿易額は、世界恐慌を機に一時落ち込んだものの、1930年代後半から増加に転じ、しかも、それまでのミャンマー側の出超の貿易バランスが入超に転じたこと、ミャンマー側の輸出品としては米、綿花、鉛などが主要商品であり、輸入品は綿布、綿製品が主要商品であったことなどを明らかにした。第2章以降で述べる3人の日本訪問の背景には、こうした両国の関係の深まりがあることが想起され、その推測を裏付けるものとして、1910年代以降のミャンマーの新聞、雑誌などに発表された日本関係の記事を渉猟して、1933、1934年の記事に日本を称揚する記事が多く見られ、なかでも、日本の綿工業の発展を紹介した記事や急速な経済発展を成し遂げた要因などを分析した記事があることを発見し、そうした記事が彼らの日本訪問のきっかけになったのではないかという推測を行っている。

ついで、第2章「1935年の著名政治家ガロン・ウー・ソオの日本体験についての研究」においては、まず、ウー・ソオがトゥリヤ（太陽）という当時の有名なビルマ語新聞の編集者であるとともに、植民地議会でも主要政党であったGCBA系の議員としても活躍していたことを明らかにし、そうした人物が日本を訪問することになった経緯について、当時ラングーンに駐在していた日本商人による募集があったこと、トゥリヤ新聞の指導部が日本紹介の記事を載せたかったことなどを明らかにした。

1935年6月の門司到着から2ヶ月弱の日本訪問で、ウー・ソオは、当初の視察目的であった日本社会の構造や教育制度、行政制度などに加えて、ミャンマー産品の輸出の可能性を探り、日本の経済発展の秘密をさぐるために、ビール工場、鉄鋼業、繊維産業、エナメル製品工場、製紙工場、石けん工場、タバコ工場などを精力的に視察した。その中で、西欧からの科学技術の導入のための日本政府の積極的な施策や日本人の勤勉で協調を重んじる気質が重要であったことを発見する。さらに、日本の義務教育制度や教育内容にも関心を示し、急速な日本の経済発展の礎をなしていたことに注目し、ミャンマーも日本を見習うべきであることなどを日本滞在中にトゥリヤ紙に順次発表するとともに、帰国後は大学や高校で講演を行いミャンマーの青年たちに日本の素晴らしさを伝え日本留学を勧めるなどしていった。帰国後は、日本領事館からの資金援助によってトゥリヤ紙の社主になるなど日本とのつながりを深めると同時に、愛国党を結成して主流派のタキン党から距離を置く独自の政治活動を行うようになっていった。

第3章「ウー・ニップ監督作の Japan Yin Thwe（日本娘）：1935年における俳優ウー・ニップの日本体験」では、俳優としても有名であると同時に数々の監督作品を発表し「ミャンマー映画の父」とも賞されるようになるウー・ニップの日本体験を扱う。ウー・ソオとともに日本にやって来たウー・ニップは、自ら作成したミャンマーの風俗習慣を紹介するドキュメンタリー映画を各地で上映するとともに、ウー・ソオらとは別行動をとり、日本を舞台としたミャンマーの飛行士と日本の女性の恋愛物語を主題とした映画を撮影し、同時に日本の四季、風俗慣習を紹介するドキュメンタリーを作成した。トーキー映画の機材を購入することが日本訪問の主たる目的であったが、この映画制作によって、日本の先進的な映画撮影技術や録音技術を吸収し、帰国後にミャンマー映画界に伝えることによってミャンマーの映画産業の発展に多大なる貢献をしたこと、「日本娘」という映画や「日本の四季」というドキュメンタリーを上映し人気を博したこと、それらはミャンマーの人々

の日本への関心を高めることにつながったことなどを明らかにした。

第4章「1936年における貿易商人ウー・フラの日本体験」では、絹織物の生産者であり商人でもあったウー・フラの日本での視察先やそこでの観察を詳細に明らかにしていった。ウー・ソオやウー・ニプらの一年後に日本を訪れたウー・フラは、ウー・ソオらの日本に学ぶべきという主張に刺激を受け、インド人などの外国商人にほぼ独占されていた当時の経済状況に不満を抱き、日本の経済、産業を視察し綿布貿易に参入する手がかりを求めて日本にやって来た。1936年8月から1ヶ月の間に日本各地を視察し、織機産業や綿織物工場などを見学し先端的な技術を目の当たりにするとともに、日本人による技術指導の可能性を探っていった。また、繊維産業の振興のために採られた日本政府の諸施策を研究し、急速に日本の産業が発展した要因を明らかにしていった。と同時にそうした経済の発展を支える金融業の重要性を認識し、ミャンマーの青年たちがこうした分野にも積極的に進出することが必要であることを実感した。帰国後はこうした経験をトゥリヤ紙に発表し人々の意識変革を求めるとともに、日本への関心を喚起していった。

これらの考察を踏まえて、結論では、日本の短期間における急速な経済発展の背景や要因について、三人が政治、文化、経済の側面からそれぞれ分析し解明していった結果を、新聞や雑誌、映画などを通じてミャンマーの人々に具体像を示し、日本に学ぶことの重要性を訴えていったことが明らかにされ、そうした主張が、ミャンマーのナショナリストの一部が日本の資金を受け入れる端緒になったこと、日本の社会経済の実情や日本人の気質や行動規範についての理解を深めることにつながったことが明らかにされ、1930年代半ばから後半は、1940年代におけるミャンマー＝日本関係の深化の基礎を築いた時代であったことを指摘している。

## 学位論文審査結果の要旨

審査会は2020年7月1日に、土口史記（主査）、渡邊佳成（副査）、和田郁子（副査）の学内審査委員3名、学外審査委員土屋洋名古屋大学准教授によって行われた。本論文の審査結果は以下の通りである。

本論文の最大の功績は、これまでほとんど注目されることのなかった1930年代の日本＝ミャンマー関係に焦点をあてて、1930年代半ばに日本を訪れた三人の政治家・ジャーナリスト、映画人、貿易商人の体験について、彼ら自身が当時の新聞、雑誌に発表した体験記や関係者の口述史料、対応する日本側の記録を丹念に掘り起こし、彼らの体験・観察がミャンマーの人々の日本への関心を惹起し、1940年代の両国の接近を準備したことを明らかにし、両国の関係やミャンマーのナショナリズムを考える上で1930年代に着目することの重要性を指摘したことである。

本年1月の予備審査において指摘された、(1)各章で新たな事実を発掘しているが断片的なものにとどまっており、各章ごとの連携がうまくとれておらず、事実の分析も表面的なものに終わっている点が散見する、(2)これまでの研究史整理が不十分で、論点が明示されず、したがって結論の重要性が読者にはわかりにくいなど、論文としての叙述、論の進め方を工夫する必要がある、という点は、本論文では修正され、上記の結論も判りやすい形で提示されていた。

また、内容について指摘されていた、(3)三人の日本体験について時系列で述べられているが、視察内容、観察内容のテーマごとの分析が必要である、(4) 1930年代を取り上げることによって明らかになったことの歴史的意義の考察が十分にはなされていない、などの点も、それぞれ、十分に考慮に入れて論が進められていた。

その結果、本論文では、以下のような重要な成果が得られたと高く評価された。

(1) 史料の発掘という点では、帰国後にそれぞれの体験をまとめた体験記のみならず、日本滞在中に順次新聞などに発表されていた記事、関係者の一族からの聞き取り調査、対応する日本側の記録（朝日などの新聞記事、日本政府の文書）など、新たに見いだした史料を駆使して事実を実証的に明らかにしていったことがまず高く評価された。

(2) 三人の日本訪問の契機について、ジャーナリスト的関心や映画機材の購入、貿易商人としての関心などの個人的動機、目的のみならず、1930年代半ばに日本訪問が集中して行われたことの背景に、両国の貿易関係が増加傾向にあったこと、日本の経済発展とその成功要因を分析した記事や日本の文化を紹介する記事などがビルマ語月刊誌にたびたび掲載されていたこと、日本訪問を促すような日本側の働きかけがあったことなどを新たに明らかにしたことは重要な発見である。

(3) ウー・ソオの日本訪問と各地における視察について、視察内容ごとに訪問先での観察を分類分析し、日本の明治以降の経済発展の要因として、政府の積極的な経済振興策、およびそれに応えることのできた日本人の資質、教育制度の成果などがあったことを読み取り、ミャンマーの人々も日本にならうべきであることを、滞在中の体験記事や帰国後の報告講演などで盛んに主張したこと、滞在中は、それを実行するべく留学生の受入の可能性について外務省の次官との面談で打診するなどしたことを明らかにし、また、帰国後は自らそれを実践し、日本への接近を通じて、言論人としても政治家としても自らの立場を強化していったことが明らかになったことは評価に値する。

(4) ミャンマー映画史的一幕としてエピソード的に語られることの多かったウー・ニップの日本での日緬合作映画の制作についても、1930年代の日本への関心の高まりの中で生み出されたものであったことを明らかにし、また、その裏には日本側の働きかけがあったこと、日本を舞台とした「日本娘」の上映や同時に制作された「日本の四季」というドキュメンタリー映画がミャンマーで上映され人気を博した結果、ミャンマーの人々の日本への関心がさらに高まったことなどを新たに掘り起こしたことも高く評価された。

(5) 一貿易商であるウー・フラの日本訪問についても、ビルマ産品の輸出増大という観点だけでなく、インド商人をはじめとする外国人に経済を牛耳られているという当時のミャンマーが抱えていた植民地経済の構造的な問題を認識し、そこから脱却するための一つのモデルとして日本を参考にしようとする姿勢が見られた点を明らかにした点は評価されるべきである。

(6) 結論で、政治、文化、経済などの異なった観点からの日本に対する肯定的評価と日本を模倣することによって植民地ミャンマーもまた発展することが可能になるという判断は、彼らの帰国後多くの人々の支持を集め、一個人の体験にとどまらず人々に共有されることによって、政治的には一部のナショナリストの日本への接近を準備し、社会全体においても日本への好意的な態度が醸成された可能性を指摘したことも大いに評価できる。

以上のごとく、1930年代半ばの各分野の人々の日本体験について、多くの新しい事実を発掘しただけでなく、その後の両国の関係、特に、ナショナリストたちの活動とそれに対する日本の関与、日本軍の侵攻とそれを歓迎した当初のミャンマーの人々の反応、などについて、これまでの歴史を書き換えることにつながる視点をも提示したという点で、本論文の意義は大きい。しかし、その一方で、審査会でも指摘されたように、以下のような残された課題もあり、それを解消した上で、ミャンマー・ナショナリズムと日本の関与に関する歴史を書き換えるような画期的な研究の完成を期したい。

一つは、残された史料が少なく、限られた史料の中での分析は致し方ないことではあるが、訪問者の見た日本像の分析という点に終始している感が否めず、それを誘導した日本側の働きかけがなかったのかなど、日本訪問の直接的契機となった在ミャンマーの日本人の活動も含めて、より一層の史料の発掘の必要性が指摘された。

二つは、彼らの日本観のミャンマーにおける受容についても、アウンサンなどナショナリスト運動の主流派は日本の動きに懐疑的な態度をとり続けたことなど、一様な受容ではなかったことについても、さらなる史料の収集分析が必要なことが指摘された。

三つは、さまざまな事実の発掘は称賛に値するが、その新たに得られた事実が歴史的にどういう意味を持つのか、それぞれの章は完結しているが論文全体としての論の構成がまだ未熟である、1930年代を考察する意義の説明が不十分である、ミャンマーだけでなく東南アジア全体を視野に入れた日本の動きとそれに対するアジアの反応なども視野に入れた考察が必要であるなど、考察の結果得られた事実の歴史的意義が十分に説明されていない部分があることが指摘された。

以上、さらに大きな研究の完成に向けての幾つかの発展的な指摘がなされたが、審査委員全員一致で、本論文自体は高度な専門性や独創性を有し、今後の展開が十分に期待できるものであり、博士論文として十分な水準に達しており、博士の学位にふさわしいものと判定した。